刻む会たより

No.49

2013. 07. 04

長生炭鉱の〝水非常〟を歴史に刻む会　代表　山口武信

事務局　宇部市常盤町一―一―九（宇部緑橋教会内）TEL〇八三六（二一）八〇〇三

活動カンパ　振込先　ゆうちょ銀行　口座番号　01590-7-32405

名義　長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会

ホームページ　http://www.chouseitankou.com

今後「刻む会」が取り組むこと

―できることから一歩ずつ―

長生炭鉱の〝水非常〟を歴史に刻む会

代表　山口武信

先般の水没事故犠牲者追悼碑の除幕式ならびに七一周年追悼集会から早や五か月が過ぎました。その節は、多くの皆様にご出席いただき誠にありがとうございました。

いま、床波の現地に行きますと「強制連行韓国・朝鮮人犠牲者」の碑と「日本人犠牲者」の碑の二つの追悼碑が建ち並び、犠牲者一八三名のお名前が刻まれた銘板の前に赤松の木片が二本置かれています。一本は海底坑道の支柱であり、今ひとつは梯子の一部であります。いずれも一九九七年二月一日に宇部市宇山海事会社のお世話で、下関市彦島の潜水夫の方に海底坑道を調べていただき、その際、岸のピーヤの海面下二七ｍの坑道から引き揚げていただいた木片であります。自宅で保管していたものを追悼碑の場所に展示しました。

また、この場所を訪れてくださる皆さんにわかるよう、正三角柱（縦二・五～三ｍ、横一ｍ）の面に「長生炭鉱水没事故犠牲者　追悼ひろば」と記した看板や一九三三年当時の写真パネル等の取り付けを計画中です。こうした追悼碑周辺の整備や拡充を始めているところです。

さらに、一昨年（二〇一一年）の九月、加藤登紀子チャリティーコンサートの際に発行しました証言・資料集の続編、第二号の編纂を計画しています。私たちはもっと多くの方々に長生炭鉱の水没事故のことを知っていただき、私たちの運動にご理解を賜りたいと考えております。

他方、福岡県の「ムグンファの会」、広島県の「高暮ダム強制連行を調査する会」との交流・連携を深め、韓国の「日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会」ができたことに呼応し、二〇〇六年に発足した「強制動員真相究明ネットワーク」に昨年団体加入いたしました。真相究明ネットの全国規模の研究集会にも積極的に参加し、情報交換や互いの連携を図って参りたいと思います。

しかしながら、「刻む会」のめざす最終目標は、「追悼ひろば」の目前に広がる海の底に放置されたままの犠牲者の遺骨等の収集を実現することであり、それは七一周年の追悼集会においても確認してきたところであります。この目標は経費をはじめ様々な面で、「刻む会」の範囲をはるかに超えたものであります。それゆえに、私たちは韓国遺族会としっかり手を携えながら、日本政府や韓国政府はもとより関係諸機関、諸団体等々に粘り強い働きかけを行なわなくてはなりません。さらに、「刻む会」の団体組織化を目指すこととあわせて、「刻む会」に集う皆さんの『共通理解』を得ながら、できることから一歩ずつ進めてゆかねばなりません。遠い道のりではありますが、今後とも皆様の一層のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

アボジ（お父さん）、クナボジ（伯父さん）、六七年ぶりに来ました！！

― 訪ねて本当によかった ―

長生炭鉱の〝水非常〟を歴史に刻む会

内岡貞雄

【はじめに】

西光寺の位牌を前に福井栄吉さん

（右から３番目）

昨年二〇一二年六月末、京都在住の在日コリアン二世の藤井潔さんと娘の歩美さんが西光寺、現地の坑口、「刻む会」事務局を訪ねてくださいました。潔さんのオモニ（お母さん、犠牲者權道文さんの娘）は事故の時西岐波小の三年で、事故の後、担任の先生が自宅を訪ね、潔さんのオモニと一緒に泣いてくれたというお話は心に残りました。

新山口駅でお別れする時、来年二〇一三年の七一周年追悼式には和歌山の伯父と一緒に必ず参加するからと言ってお別れしました。

二〇一三年二月一日（金）の夕刻、約束通りに伯父の福井栄吉さん（權道文：クォンドムンさんの息子）が潔さんご夫妻と娘さんの四人で来宇されました。薄暗くなった長生海岸を車で走りながら、「ここは見覚えがある。ここは少し変わったかな」となつかしさに声をふるわせていました。追悼式・追悼集会を終えた翌二月三日（月）、小一時間ほど炭鉱跡を栄吉さんとご一緒に歩きました。山口代表が家庭訪問で初めて長生炭鉱の炭住を訪れた場所の近くに住まいがあったこと、炭鉱経営者の住居のすぐ西に四棟の朝鮮人寮があったこと、浜中集会場付近は火葬場であったこと、ピーヤを連ねる海底坑道を出た坑口辺りに選炭場があり、トロッコの線路が複雑に何本も走っていたこと、この真うしろに巻揚機のワイヤーロープがゴウゴウ音をたてて動いていたことをしっかり記憶されていました。当時、栄吉さんのオモニがすぐ近くの選炭場で仕事をしていたので、尋常高等小学校の栄吉さん（一四歳ぐらい）はオモニにたびたび会いに行ったので、この付近はよく覚えていると言われました。

新山口駅で栄吉さんたちとお別れしましたが、後日、甥の潔さんのお話では、新幹線の中で長生炭鉱の事を思い出すたびに涙を出されていたそうです。その後、栄吉さんから達筆のお手紙を頂戴しましたので、〝福井栄吉さんの証言〟としてご紹介いたします。

【事故を思い出すと涙が止まりません】

長生炭鉱の事故。一九四二年二月三日、西岐波尋常高等小学校に突如、緊急事態発生。「長生炭鉱の生徒の皆さん、急いでお帰り下さい。事故です！」私が一四歳の時でした。

何がなんだか分からず、一目散に我家へ我家へと急ぎ走り進んで、だんだん近づくにつれて海の水面を見ました。「あれはなんだ！」と、ビックリ！あちらこちらに水柱が数ヶ所立ち上り、浜辺では大勢の人が立ち座り、沖を見て泣き叫び、飛び上り、海を沖へと地面を叩いて大勢の人が泣きわめき、まさにこの世の地獄…。

私は母二人（実の親と養親）、妹を探して、共に泣き、共に悲しみ共に労り合って、海の底の坑内まで届けとばかり沖を見ますと、水柱の周りに舟が何か放り込んでいるように見えました。いつまで経っても水柱が続いています。

ただ、涙も枯れて一晩中泣き喚く。あちら

でもこちらでもワーワー泣き叫び、もう皆さん半分気がおかしくなったごとく…。

思い出すと泣けて、泣けて、もう涙も出ません。いつまでも水柱が吹上げて日も暮れ炭鉱の町は死の世界。人通りもなく、ただ薄暗い炭鉱の町。炭鉱の坑口で大勢の人が　助かって出て来る人を待ちました。唯一人いませんでした。

私は生まれて間もなく、伯父さん（權五文さん）に子供がないので引き取られて、自分の子供にして育てられました。父と母はなんの抵抗も出来ずそのまま、伯父さんに育てられ、教育を受け、教育には大変厳しい人で、毎日、読み書きをさせられて、大変厳しく育てられました。

ある時は、炭鉱の事務所に若い坑夫を連れて折檻をするのを大勢の人が見に行っていました。だが伯父さんは「絶対に見るな」と言って見せませんでした。「見るものでない」と言っていました。

炭鉱の事故で二人が（父と伯父）亡くなったのに韓国から身内が来ませんでした。ほかの人は来ているのに、悔しい淋しい思いをしました。

また、義理の母は弟が来て家財道具全部持って行かれ、義母と大喧嘩し別れました。あの時の寂しさはいまだに忘れません。

私は一九四四年(昭和一九)四月に長生炭鉱（第二坑）運輸課に入社、検炭係でした。炭鉱は一九四五年(昭和二〇)八月一五日終戦、閉山しました。

わたしたちは炭鉱から出なければなりません。家が見つからず、近くの物入れ小屋六畳間ぐらいの茅葺の小屋を借りて住みました。母一人妹四人と小生の六人家族。炭鉱以外なにも知らない私です。

※福井栄吉さんは正確な記憶を頼りに、一か月以上費やし、詳しい長生炭鉱坑外配置図を作成してくださいました。

追悼碑の前で、ひ孫の有美さんと栄吉さん

《刻む会の活動報告》

※前回発行以降

▽三月四日(月)～五日(火)
第一〇回東西中国教区課題共有研修会

▽三月八日(金)　「刻む会たより」No.四八
発送作業

七一周年追悼集会打ち上げと建立委員会感謝会

▽三月二三日(土)　春のフィールドワーク
(※4頁目　報告参照)
事務局会議

▽三月三〇日(土)　第6回強制動員
真相究明全国研究集会
(※5～7頁目　報告参照)

▽四月一八日(木)　事務局会議

▽五月一六日(木)　事務局会議

▽五月二六日(日)　無窮花の会総会

▽五月二八日(火)　日韓平和コンサート
手伝い

▽五月三一日(金)　李熙子（イ・ヒジャ）
さんフィールドワーク

▽六月一三日(木)　事務局会議

▽六月一八日(火)　対宇部市交渉

第６回強制動員真相究明全国研究集会に参加して

テーマ「強制動員真相究明の到達点と今後の課題」

二〇一三年三月三〇日（土）
東京大学駒場キャンパス

長生炭鉱の〝水非常〟を歴史に刻む会
内岡 貞雄

長生炭鉱の報告を行なう筆者

【はじめに】

韓国に「日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会」（以下、真相糾明委員会）が設立されたことに呼応し、日本でも飛田雄一さん、内海愛子さんらを共同代表とする「強制動員真相究明ネットワーク」（以下、真相究明ネットワーク）が結成されました（二〇〇五～二〇〇六年にかけて「長生炭鉱の水没事故に関する真相調査」を実施して以降、私たち「刻む会」とも深い繋がりがあります。（調査委員は、当時調査３課、現在支援委員会調査１課長の許光茂（ホ・クァンモ）さんたち。）

昨年、「刻む会」が真相究明ネットワークに団体加入したこともあり、本年三月に開催された第６回全国研究集会で「長生炭鉱犠牲者追悼碑建立」に関する報告を行なってきました。参加者は約一〇〇人ほどでした。

【長生炭鉱の報告】

●薛道述（ソル・ドスル）さんの証言

「一九三九年一〇月、二一歳の時に強制動員された。関釜連絡船で下関港まで行き、宇部の長生炭鉱までは小さな石炭運搬船で運ばれた。海岸沿いの四棟合宿所は大きな板塀で囲まれ、食堂は四〇〇～五〇〇人が一度に入れる大きさでした。私の鉱夫番号は『２２２７』で、すでに二〇〇〇人以上が朝鮮半島から連れて来られていると思いました（実際は鉱夫番号２００１からはじまっていた）。私は比較的条件のいい採炭場所を確保できたので、出来高もまあまあでした。でも、毎日つらい労働で、くじけそうになりながら郷里の父や母、家族のことを思って頑張りました。事故当日（一九四二年二月三日）、坑口付近は怒号や喧噪、緊張感が漂っていました。会社側が坑口を塞いだのは、『二次的被害』を防ぐためだったと思います・・・。」

本集会出席者の方々は韓国調査委員の許光茂（ホ・クァンモ）さんをよく御存じでした。また、共同代表の飛田雄一さんは「一昨年（二〇一一年九月）の加藤登紀子チャリティーコンサートに参加しましたよ」と声をかけてくださいました。

【研究集会の報告から】

●竹内康人編著「戦時朝鮮人強制労働」資料集（二〇〇七年　神戸学生青年センター出版部）は貴重なデーターが満載！竹内さんは全体報告で「日本での朝鮮人強制連行調査の現状と課題」を詳細に報告されましたが、そのエネルギッシュな調査活動に圧倒させられました。同資料には死亡者名簿一覧が載っていますが、Ｐ一八七～Ｐ一九〇は長生炭鉱をはじめ宇部の炭田関係部分です。沖ノ山炭鉱の犠牲者（死因：労災）は三〇名うち本名判明者は七名、桜山炭鉱の犠牲者（死因：労災）は七名うち本名判明者は４名です。長生炭鉱の犠牲者（死因：水没事故）の場合は、一三六名のうち本名判明者は一二三名であり、「刻む会」の長期にわたる取り組みや韓国遺族会・関係機関や団体等との情報交流の成果が見てとれます。なお、竹内康人さんには長生

炭鉱犠牲者で本名判明の方々の名前四〇名を、先日、お知らせしました。

全体報告を行なう竹内康人さん

●活動報告は以下の９レポートでした。

○奈良・発掘する会（高野眞幸さん）

○滋賀県から（河かおるさん）

○長野県強制労働調査ネットワーク（原英章さん）

○強制労働被害者補償立法をめざす日韓共同行動（矢野秀喜さん）

○浮島丸事件（青柳敦子さん）

○「慰安婦」問題の現状と課題（梁澄子さん）

○旧日本海軍朝鮮人軍属関連資料（二〇〇九）の紹介（沈在昱さん）

○長生炭鉱の〝水非常〟を歴史に刻む会（内岡貞雄）

○強制連行強制労働犠牲者を考える北海道フォーラム（殿平善彦さん、以下北海道フォーラム）

ここでは、北海道フォーラムの取り組みを紹介いたします。（他の発表については事務局に各レジメを置いていますので、ご覧になりたい方は一報ください）

北海道フォーラムは二〇〇三年一〇月に立ち上がりました（「刻む会」結成一二年後）。メンバーは諸団体所属の日本人、在日韓国・朝鮮人、中国人有志が、遺骨を遺族のもとへ返還しようとする本願寺札幌別院（浄土真宗本願寺派）の取り組みに協力する形で結成されました。北海道フォーラムは、市民主導で遺骨奉還を行なった経験を持っておられます。北海道の室蘭・日鉄（札幌の南南西三〇〇キロ）に連行され一九四五年七月に犠牲になった三人の朝鮮人犠牲者、一九四五年一〇月に赤平（札幌の北東三〇〇キロ）で死亡した朝鮮人犠牲者の遺族は、二〇〇五年、二〇〇六年に室蘭と赤平を訪れて遺骨に対面しました。その折は、まだ日本政府と企業による謝罪と補償を伴った返還を期待していたので、遺族たちの皆さんは遺骨を保持して帰国することは断念しました。しかし、二〇〇七年になっても政府や企業は一向に遺骨返還に動く様子はなく、しかも犠牲者の姉が病気で寝込むようになり、犠牲となった弟の遺骨を迎えることなく命を終える心配も出てきたのです。そこで北海道フォーラムは市民の手で遺骨奉還を計画し、韓国曹溪宗奉恩寺住持明盡師の協力を得て、二〇〇八年二月二八日に、北海道フォーラムと赤平、室蘭市民が４体の遺骨を韓国の遺族に届け、天安（チョナン）にある望郷の丘に安置、埋葬しました。これに対して、市民運動内部や韓国政府内部から批判的な意見も出ました。それは「日本政府の責任において遺骨返還が実現されるべきで、市民主導による遺骨返還は、市民運動からの政府による遺骨返還を要求する活動に水を差し、日本政府に返還に動かない口実を与えるのではないか」という懸念でした。北海道フォーラムは、強制連行犠牲者の遺骨返還が、日本の戦後補償の一環であることは間違いないことだが、日本政府の責任においてのみ実現すべき課題とは言えないと考えました。これまでも遺骨は犠牲者の親族、友人や民団などの手によって返還されたこともあるし、市民運動が捧持した例もあるからです。要するに遺骨奉還の意味は、遺族の犠牲者への思いに応える追悼の側面が大きいのであり、宗教者や市民の心のこもった奉還は、東アジアの歴史和解を実現するうえで大切な取り組みではないかととらえました。ちなみに、北海道フォ

ーラムの二〇〇八年奉還に際して、日本政府に参画を求めて、外務副大臣、北海道知事がメッセージをよこし、新日鉄製鉄室蘭営業所からは花輪と追弔金が遺族のもとに届けられたのです。

日本政府や責任を負うべき企業が遺骨返還に動こうとしない今日、**彼らの責任を明らかにしながら**、市民や宗教界がイニシアティブを発揮し、遺骨奉還を実現する方策を考えることも、一方では必要ではないかと考えています。

【おわりに】

今回の第６回全国研究集会で多くの市民団体の皆さんと「出会う」ことができました。「刻む会」として自立した取り組みを行ないながら、他団体との連携・連帯を構築していくことの大切さを実感しました。長生炭鉱衰水没事故犠牲者の遺骨や遺品収集に到る道は遠く霞んでいますが、しかしそこに向かって確実に一歩一歩前進するために「何をなすべきか」、私たちは共通理解を深めていかなくてはなりません。

多くの皆様のご支援・ご協力を今後もお願いいたします。

春のフィールドワークを終えて

―　今年も地元に住んでいた方の参加がありました　―

長生炭鉱の〝水非常〟を歴史に刻む会　内岡貞雄

第二回の春のフィールドワークは三月二三日（土）一〇時から行ないました。

長生炭鉱追悼碑建立地→江頭川→新浦炭鉱（長生炭鉱第二坑）→炭住社宅（浜中集会所付近に火葬場）→朝鮮人合宿所→炭住社宅（海岸に直角方向へ社宅長屋が三棟、七～八列）→会社事務所・「殉難者之碑」→本坑口→ピーヤの見える海岸などを歩きました。例年よりずいぶんと早い桜の満開時期で、暖かい春の陽ざしを一杯に浴びながら廻りました。参加者は二六名で、子どもたちが二名と少ないのはちょっと残念でした。

反省点として、①終了時間がオーバーしたので予定時間を守った方がよい。②子どもたちの参加が少なかったが、予定通り子ども中心のフィールドワークでもいいのではないか。③追悼碑建立地のスタートは紙芝居か簡単な長生炭鉱水没事故の説明等があった方がいい、等々の意見がありました。二〇一四年三月に向けて改善していきましょう。今年も地元新浦地区で生活されていた方の参加があり、朝鮮人寮西の炭鉱社宅の配置の様子、火葬場、小さな工場が操業していたこと等を教えていただきました。

平和の尊さ　心に刻む
長生炭鉱でフィールドワーク

宇部日報（2013.3.24）

内岡副代表（右端）から木片などの説明を受ける参加者たち（追悼碑広場で）

海に沈んだ長生炭鉱フィールドワークが23日、床波海岸一帯で行われた。小学5年生から80歳代まで22人が参加。約2時間かけて炭鉱社宅や本坑口などを見て回り、当時の様子を振り返りながら、平和の尊さをかみしめた。

長生炭鉱の〝水非常〟を歴史に刻む会（山口武信代表）が、毎夏取り組んでいるフィールドワークに加え、昨年から春にも実施。今年2月に完成した床波1丁目の追悼碑広場を発着点にした。

山口代表は「事故で亡くなった方たちの魂のよりどころとなる追悼碑はできたが、これからやらなければならないこともたくさんある。日韓関係は先鋭化の動きもあるが、日本にとって韓国は大切な隣国。碑が日韓親善の礎の一つとなってほしい」とあいさつした。

案内役を務めたのは内岡貞雄副代表。ピーヤ（通気口）を模した2本の追悼碑の間にある献花台には、1942年に発生した落盤・水没事故の犠牲者183人の名前を書いた木札が納められている。内岡副代表は「日本人犠牲者47人の中に、地元の人は少ない。年齢は40歳すぎが約6割を占める。韓国・朝鮮人の犠牲者は136人で、兄弟や同じ村からやって来た人もいる」などと説明した。

1997年にピーヤ内部の潜水調査で見つかった、はしごの支柱と思われる長さ約3㍍の木片も、この日から同広場で展示を始めた。参加者たちは、新浦炭鉱殉難者之墓、3軒長屋の炭住、朝鮮人寮の跡、本坑口などを巡り、ピーヤを望む海岸では献花をして犠牲者の冥福を祈った。（松原）

韓国の炭鉱施設を訪ねて

山田健一

一九四二年二月の太平洋戦争中、山口県宇部市の長生炭鉱で水没事故が発生した。水没事故から七一年目にようやく歴史を刻む会の念願かなって、犠牲になられた方々の追悼碑が瀬戸内海に面した床波漁港近くに完成した。これを受け、次の追悼作業となる「海底坑道に眠る犠牲者の遺骨収拾」の計画案作成へ着手することにした。計画案を作成していく中で、計画案を実現性あるものするには、炭鉱の実設備を調査することが必要であることが痛感された。

しかし、我が国では現在稼働中の炭鉱が極めて少なく、ほとんどが廃坑となっている。そこで海外に稼働中の炭鉱を捜したところ、隣の国、韓国在住の友人より現役炭鉱があるとの連絡をいただいた。これにより、現役炭鉱の訪問が実現したものである。訪問は二〇一三年三、五月の二回にわたり行い、一回目は韓国東北部の休戦ラインに接する江原道（カンウォンド）・太白（テベク）地区の炭鉱施設で、二回目は韓国南西部に位置し民主化運動で有名な光州広域市の和順（ファスン）郡の炭鉱施設である。

今回、訪問するにあたり、次の２つを具体的な目的とした。

（１）現在稼働中の炭鉱施設を見学することにより、〝長生炭鉱水没事故遺骨収拾Ｆ／Ｓ（実現化検討）〟をイメージ化する。

（２）炭鉱訪問の過程で、現場の方々より右記のＦ／Ｓについて助言を頂く。

一．太白地区

ここで訪問したのは、稼動中の炭鉱四カ所、炭鉱は閉山されたものの跡地が公園や博物館として利用されている２カ所、および廃坑となった六カ所の計一二カ所である。なお、稼動中の炭鉱のうち国営炭鉱の三カ所では施設見学に許可が得られず、外部からの見学にとどまった。

稼動中の炭鉱として、民営の江原（カンウォン）炭鉱（図4、5）では入構が快諾された。訪問した日がたまたま土曜の休日であったために石炭輸送トラックの往来がなく、我々の安全が判断されたため許可をいただいた。この時の現場作業の困難性に関わるご説明が、長生炭鉱で遺骨収拾Ｆ／Ｓ作業を進めていく上で大変参考にさせていただくものとなった。例えば、図4.正面に写っている水平坑道の掘進作業時の多量な湧水による衝撃等の影響とそれに対する対策などである。

図1. 現在稼働中の国営長省（チャンソン）炭鉱、竪坑巻揚機櫓

図2. 炭鉱体験公園内ある廃坑ハムテ炭鉱の竪坑坑口

図3. 正面のエレベーター状の構造物はハテム炭鉱竪坑を上下していたケージ

図4. 坑口正面の左側で地上を走っている鋼管は通風管である。通風管の下にある側溝からは、多量の坑内排水が流出していた。

図5. 江原炭鉱で見受けた坑木

図6. 支保形式がコンクリートまきの廃坑ハテム斜坑

図7. 支保形式が鋼製アーチ枠の廃坑上徳（サンドク）炭鉱

二．和順地区

ここ和順は、かつては約三五カ所の炭鉱の操業により湖南炭田と言われていた地域で、現在、稼働している炭鉱は国営の和順鉱業所のみである。一九〇八年頃から開発された和順鉱業所は無煙炭を産出する炭鉱で、一九三四年から太平洋戦争が終わるまでは日本の財閥グループにより経営されていた。現在の全従業員は六〇〇名、勤務形態は八時間の二交代制で、出炭量は二四万トン／年とのことである。

和順鉱業所は国営炭鉱であるにもかかわらず、太白の場合とは異なり、地質開発課長による丁寧なご案内と説明を頂くことができた。これは、（株）バイオ和順社のご尽力によるものであった。図8.から図11.に、和順鉱業所の主な炭鉱施設を示した。とくに、図10.は入気坑道の坑口、図11.は排気専用の坑道で、長生炭鉱ではピーヤに相当するものである。開発当初、これら入排気坑は自然通気として設置されたそうで、この点は長生炭鉱の場合のピーヤと共通性がある。

また、前記の課長より、「海底炭鉱の経験は無いものの」との前置のうえで、我が国の長生炭鉱水没事故に関し次のような助言を頂いた。

（1）水没後の坑内で海水の更新が無ければ酸素の供給も無いので、予想に反して、遺体等は傷んでいないかも知れない。

（2）当時の坑道の枠組は鋼鉄ではなく材木で創られていただろうから、木材は鋼鉄に較べ剛性が無く

出水による坑道のダメージが大きく、おそらくそれは壊滅的なものであったのではなかろうか。

（3）炭鉱では、排水ポンプ設備は人命を左右する重要な装置である。このことから、和順鉱業所での排水ポンプ設備についてご説明をいただいた。

そこで、これらの助言をもとに、我が国の長生炭鉱でかつて設置されていたポンプ排水設備について検討を試みた。図12.は、長生炭鉱の断面構造および排水系統設備を示した想像図である。坑内の各箇所で湧き出ていた水は、陸側に向けて勾配を付けた坑道の側溝で自然流下させて坑道の最低部に位置するポンプ釜場の一カ所まで集められ、ピーヤを経由して坑外へ揚水されていたと推測される。この自然流水排水法は、一見、設備構成が簡素で優れた方法に思える。しかし、図12.から分かるように、沖側へ坑道を掘進して行くに従って、坑道と海底間の地層厚みは薄くなっていくことになる。このことは海底と坑道間の地層の地耐力の低減を意味し、海底炭鉱の長生炭鉱にとって、致命的な構造となったのではないかと推測された。

図10. 換気用入気坑道

図9. 運炭専用坑道

図8. 人道・資材搬入坑道坑口

図11. 換気用排気坑道

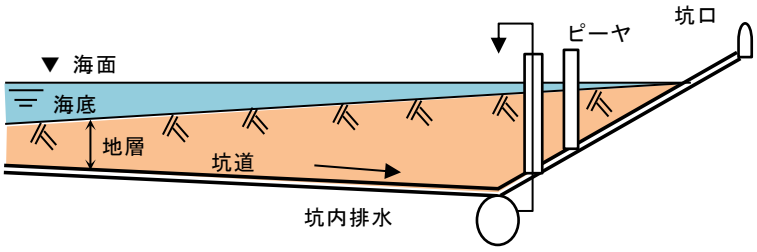

図12. 長生炭鉱の自然流水排水法

おわりに

今回の二度にわたる韓国の炭鉱訪問で得られた知見をもとに、懸案となっていた遺骨収拾F／S仕様書を完成させることができた。この仕様書については、別途、関係者の方々に報告することにしている。

今後の予定として、韓国の炭鉱の訪問を重ねて、特に坑道内施設の技術知識を習得し、上記仕様書内容の深化と補完を図って行こうと考えている。

「刻む会」の組織化について

事務局長　小畑太作

71周年の追悼集会を終えて、すなわち念願の追悼碑除幕を終えて2月20日に開催された事務局会議は、今後、新たな方策を策定すると共にそれを担っていく体の再構築、つまり組織化の必要を確認した。しかし実はこの組織化の課題は、追悼碑建立以前より、毎回の事務局会議において議事には上げていたものの、目下の課題である追悼碑に関して時間を割かざるを得ず、建立が果たされる時まで取り扱えなかったというのが事実である。結果として、追悼碑建立時点で現れていた最も顕著な問題は、追悼碑の土地が個人名義のままと言うことであった。いわば、「刻む会」はそれを持ちたくとも、体がなく、従って持つ手もないのである。

土地、すなわち財産を所有するには、理想論だけでは通じない現実問題としての法律がある。つまり、法律が認めるところの何らかの人格（法人）とならなければ、「刻む会」には持つ手がないことになる。また同時に、所有している個人も、その相続権者も、いつまでもその土地を気前よく「刻む会」に提供し続けるという保証がないとすれば、「刻む会」は実際公有のその財産を危険に曝しているとのそしりを免れないことにもなる。

この財産所有の問題について、「刻む会」が出した一つの結論は、長年事務局を置いてきた緑橋教会へ土地を寄贈すると共に、「合意書」を取り交わしてその管理責任は「刻む会」にあることを明確にすることであった。しかし、その事を巡って緑橋教会と協議する中で「刻む会」の主体が不明であることが浮上した。すなわち、財産所有の課題への取り組みにおいて改めて組織化そのものの問題が浮上した形となったわけである。

そもそも、組織化がかねてから議事に上げられていたわけは、財産所有の課題の解決の他に、「活動をより拡げていくため新たな参加者への道筋を明確にするため」「丁寧且つ必要に応じて迅速な意思決定を行うため」「意思決定を行う人々の民主的な選任のため」等の目的があったが、財産所有について、緑橋教会との協議を進めるためには、こうした組織化そのものの課題を避けることはできないこととなった。あるいは独自の法人格を取得するとなればなおのことである。

現在までのところ、「規則(案)」「合意書(案)」の作成まで進んでいるが、今しばらくこれらの検討と協議を重ねる段階にある。一つには、勿論、不慣れな条文の検討と言うことがあるが、もう一つには、それ以前に、実のところ現在の「刻む会」事務局内部にはまだ組織化へ踏み出す事への躊躇もあり、またどの程度の体とするかについても様々な意見があるからである。いずれにしても、これまで通り丁寧な議論を重ねてつくり上げていきたいと思う。

これまでご支援下さった皆様からのご意見も是非とも伺いたいのであるが、その場が保証されていないところに組織化の問題そのものがある。が、逆に、いつでも自由に言えると解することもできる。確かに一長一短ではある。しかし、新たな段階へ、新たな決意を持って進めていく必要があるであろう。

年２回フィールドワーク開催中！

昨年から春と夏、年に２回のフィールドワークを開催しています。
春は春休み期間に開催します。さわやかな春の日差しの中、子ども達と一緒に、文字通り跡地を巡って歩きます。
夏は夏休み期間に開催します。近年の酷暑の中では外での開催は厳しく、室内での企画を中心に、追悼碑、ピーヤへの献花を行います。子ども達への夏休み中の平和教育として、有意義な企画となっています。
ぜひ一度、皆様もご参加ください。

★「長生炭鉱水没事故犠牲者追悼碑建立募金」会計報告 (2013年2月22日～4月12日)

(円)

収入				支出			
科目	期間実績	累計	備考	科目	期間実績	累計	備考
カンパ	2,034,000	16,860,809		事務費	0	275,595	
物販	0	258,200		委員会費	0	7,140	
雑収入	0	13,281		土地管理費	609	2,602	
コンサート	0	769,037	加藤登紀子	雑支出	330	71,670	手数料等
借入金	-2,400,000	0		建立費	0	12,189,130	
繰入金		1,430,000		繰出金	0	1,444,870	刻む会会計へ
				税金	0	283,735	固定資産税
				小　計	939	14,274,742	
				残　高	-366,939	5,056,585	
合　計	-366,000	19,331,327		合　計	-366,000	19,331,327	

カンパ内訳（個人）太田道子　川端安子　木村道江　佐々木明美　島敞史　山内弘恵
（団体）日本基督教団隠岐教会　日本基督教団廿日市教会

★「刻む会活動費」会計報告 (2013年2月22日～4月12日)

(円)

収入				支出			
科目	期間実績	累計	備考	科目	期間実績	累計	備考
カンパ	29,000	249,727		繰出金	0	5,996	会計処理
物販	10,500	11,500		事務費	13,903	485,813	
繰入金	0	2,496,814		活動費	40,000	1,864,397	
雑収入	0	15,200		追悼集会	0	1,612,101	
				フィールドワーク	0	14,433	
				その他活動	40,000	237,863	派遣費用等
				交流費	5,000	5,000	団体会費
				雑支出	630	6,854	手数料等
				小　計	99,533	2,368,060	
				残　高	-60,033	405,181	
合　計	39,500	2,773,241		合　計	39,500	2,773,241	

カンパ内訳（個人）石谷忠之　藤本明美　　（団体）日本基督教団東西中国教区課題共有研修会

以上は追悼碑建立募金開始から建立までの全累計会計です。追悼碑建立に伴い、上記の二つの会計は終了し、以下の新たな会計に引き継ぎました。またその際に、残高より5,259,766円を別途特別会計として積み立てることとしました。

★「刻む会」会計報告 (2013年4月13日～5月31日)

(円)

収入				支出			
科目	期間実績	累計	備考	科目	期間実績	累計	備考
繰越金	200,000	200,000		事務費	0	0	
カンパ	50,000	50,000		広報費	53,905	53,905	
物販	0	0		追悼碑管理費	1,784	1,784	
雑収入	0	0		活動費	0	0	
				税金	53,449	53,449	固定資産税
				小　計	109,138	109,138	
				残　高	140,862	140,862	
合　計	250,000	250,000		合　計	250,000	250,000	

カンパ内訳）足立龍枝　田崎敏孝　山下睦子

これまでのお支えに心より感謝します。今後とも何卒よろしくお願いいたします。

宇部日報　２０１３年２月１４日掲載

エッセイ

アボジは海の底に

広島　友好

朗読劇『アボジは海の底』。

長生炭鉱の「水非常」を描いた作品だ。

昨年六月、「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」から脚本依頼があった。

一九四二(昭和一七)年二月三日早朝、宇部市床波(長生)の海底炭鉱で起きた水非常(水没事故)は、一八三人の犠牲者を出した。そのうちの約七割、一三七人が朝鮮人炭坑夫だった。戦時体制の日本が「募集」という名の強制連行で朝鮮から連れてきた男たちである。

宇部に住む物書きとして、いつかはこの悲劇を芝居にと思っていた。「水非常」に向き合うことは、日本の劇作家の責務である。

芝居を書く上で難しかったのは、話のクライマックスが見る前からわかっていること。最後には水非常が起きて、炭坑夫たちは犠牲となる。この結末に向かって芝居は進む。

しかし、話の大筋は変えられない。

そこで考えたのが、主人公の設定だ。

床波の海には今でも二本のピーヤが海から突き出ている。これは長生炭鉱の排気・排水筒である。この二本のピーヤを、犠牲となった二人の朝鮮人炭坑夫に見立てた。

一人は家族思いの若いアボジ（おとうさん）。もう一人はその親友で、熱い心と民族の誇りを胸に持った青年。

今はピーヤとなった二人が、長生炭鉱での過酷な日々を思い出す。狭い、暗い坑道内での一日一二時間の労働。着た切りのボロ作業着。麦入り飯にわずかなおかず。高い塀で囲まれたタコ部屋のような寮での集団生活。そして、日本の国策による石炭増産と安全軽視のために起こるべくして起こった水非常――。

主人公が決まり、物語が動き出す。あとは心を込めて書くだけだった。

さて、脚本を舞台化するためには多くの人の協力が要る。

今回は、全犠牲者の名前が刻まれた慰霊碑の完成を記念した追悼集会での上演となる。そのため、ぜひとも成功をと、宇部の劇団人を中心に、一〇代の女の子から七〇代の女性まで、皆ボランティアで集まってくれた。

中でも、若い男性の参加がありがたかった。長生炭鉱の犠牲者は二〇代・三〇代の若い炭坑夫が多いのだ。特に主人公二人は若い男性でなければならなかった。それが運良く、ぴったりの配役に恵まれた。稽古も熱心。日増しにいい芝居になる予感がした。

さてさて、慌しい稽古期間を過ぎ、本番の日となった。ご遺族二〇人が見守られる中、幕が上がる。芝居は熱演。荒さも目立ったが、心は十二分にこもっていた。台本を持っての朗読劇だが、退屈にならぬよう動きもある。迫力満点。

わたしはこの芝居に覚悟を持って臨んだ。遺族の心を打つものでなければならない。同時に日本人の心にも響かなくては。劇中に、「天皇制批判」も出てくるので、叩（たた）かれることもあるだろう。そういった覚悟。

芝居でわたしは長生炭鉱の社長を演じた。炭鉱の増産を命じる場面では、遺族の錐のような突き刺す視線を感じた。こんな「痛い」演技経験は初めてだった。

そして芝居はついにクライマックス、水非常の場面へ。

「地獄がほけた！」

と炭坑夫たちが叫ぶ。海の底に沈む男たちに、家族たちのアイゴーの声が哀しく響く。波の音がその声さえも飲みこんでいく。そして歳月は無情に流れ…

幕が下りる。会場は熱い拍手に包まれた。

その夜の祝賀会で、たくさんの方が握手を求めにやってこられた。口々に「よかった」「涙が止まらなかった」とおっしゃってくれた。中でも、社長役のわたしを痛いほど睨（にら）んでいた、犠牲者のひ孫の若い女性から、

「本当によかった、ありがとう」

と素敵な笑顔で声をかけられたときは、心底ホッとした。苦労が報われた。

いやいや。

わたしのそれなど、苦労と呼べるものではない。海の底の人たちに比べれば。遺骨はまだほり出されていない。

「アボジは海の底」にいる…。

熱演する広島友好さん